

「お花見の巻」

春ですね。とはいえなにやら寒い日も多く、寒暖の差が身に染みます。

さて毎度おなじみのこの駄文、極私的にハウスミュージックに関する話題を、という本旨からはまたしても離れ、雑感をつらつらと――。

寒い日もあるとはいえ春になると必ず桜は咲くもので、今年も鴨川は観光客であふれかえっていました。普段はそれほど交通量の多くない近くの冷泉通りも桜の季節は例外で、車道は渋滞、歩道もカメラ片手の人でいっぱいになります。

花見ってなにげなく春の風物詩のようにやりすごしていますが、よく考えれば真昼間から外で大宴会を繰り広げてもOKとされてしまうという、なかなかブツとんだ行事ではないでしょうか。

なかには桜が目当てとはとうい思えないほど、呑み物・食べ物に力を入れているグループを見かけることもあります。BBQはもちろんのこと、イス・テーブルといったセッティングから、暗くなったときの照明まで、なかなかみなさん気合を入れているご様子。

かたやそこまで前もって準備をしてなかったけど、というようなグループもあり、そんな場合は隣の盛大な準備の様子をチラリ横目にしながら、いかにも急ごしらえにコンビニで買出しを済ませてツマミ少々にビールをシュバつとあけて勢いよくグイっといき、グビグビとノドを潤したりしています。

子どものころにも、咲き誇る桜の下でオッサン／オバサンたちがごちそうの詰まったお重を上げつつカラオケセットや楽器まで持ってきて熱唱しながら踊りまくっているのを見たことを思い出します。おもえばあれは同郷の人どうして集まり、懐かしい故郷のうたを歌いながら春の到来を喜ぶ、特別な春の行事だったのでしょうか。

以前近所で寄席があったときに聞いた落語も花見の嘸でした。カタブツで知られる番頭が花見でのご陽気さんぶりを主人に見られてしまうというもので、「百年目」という古典落語の有名な嘸だそうですが、花見って昔から無礼講だったのですね。

楽しみかたは人それぞれとはいえ、やはり桜が咲いて暖かくなると心踊るものなんでしょうか。

桜はもうすっかり散ってしまいましたが、5月といえば吹く風も心地良い季節。collectiveで季節を感じながら楽しいひとときを過ごしてください。

てなことで、エンジョイしましょう！

世間がバレンタインモードに浮かれている頃、ちょうど僕はひとり暮らしが2年の節目を迎えようとしていた。はじめて自分で借りたマンションはcollectiveの会場となる雲州堂から徒歩1分と、ロケーションは申し分なかったが、クローゼットにスーツがかけられなかったり、キッチンが激セマだったり、ヒサシがないベランダだったり、使い勝手の悪いものだった。「こんな生活はもうゴメンだ」ということで僕は次なるねぐらを探し始めた。

金を出せば良い条件の部屋はいろいろと出てくるものだ。ところが不幸なことに部屋探しはグダグダと難航し、気づけば30件近くまわっていた。僕と仲介業者双方に疲れの見え始めたところでようやく契約した物件が今のマンション。コンロが1口から2口になり、1Kから1DKになったおかげで住み心地がすこぶる良くなった。当然賃料は上がったのだが……。

広いエリアで物件探しをしていたものの、今のマンションを契約する決め手となったのは結局、雲州堂の近所だということだった……。他に何もしない僕がターンテーブルを運ばなかったらメンバーからどやされますからね。

今回でコレクティブはめでたいことに20回目の開催となるが、正直なところ、僕はその1回1回をしっかりと振り返れる自信がない。かなり偏った記憶の断片が脳みそにちょっとした付箋のように控えめに貼り付いている程度のもんだらう。ただ、はっきり言えるのは、自分が雲州堂の近くでひとり暮らしを始め、コレクティブの都度、部屋からターンテーブルを運び出すようになってからというもの、自分にとってのパーティーの位置づけが以前よりも大きいものになっているということだ。

自由気ままな一人暮らしというが、その内訳は、日常の炊事、洗濯、掃除、入浴や排泄など、ルーティーンをこなすことに対してほとんど時間を割くことになる。ただ、その行為を「一人でやる」ことによって、自分を省みる時間も多くなるものだ。実家の近所にあるバーのマスターは「とある事情による一人暮らし」をしている渋い団塊世代のおっちゃんだが、「部屋では常に一人なのに、不思議なことに、じつくと考え事をするときには、わざわざトイレか風呂に入るもんだ」と話していたのを思い出した。

どうしたって、帰った部屋には自分一人しかいない。そこが起点になるからこそ、毎日がとてもカラフルに映って見える。人とつながることの大切さもわかる。「いやー、パーティーっていいですね」なんて言いながら、今日もカラフルなミナサンにここで会えてうれしいです。ありがとう。

information

次回コレクティブは夏頃を予定しています。
詳細はブログでご確認ください。

<http://blog-collective.blogspot.com/>

新選組旅行記 山南敬助について “楠田行展”

「逃げる」という言葉は実に卑怯な響きを持っています。僕は基本逃げることは嫌いです。逃げることはもちろんあります。営業、取材先へのアプローチの甘さ。公私問わず人間関係からの逃げ。様々です。皆さんはどうですか。逃げてませんか。人間が逃げるといふこと。それは脅威、責任を避けることを意味します。しかし、新選組隊士にとって逃げることは逆だったようです。

入隊希望者には広く門戸を開放した新選組。武士として扱われることを夢見た者が集まり入隊しました。しかし隊士が増えるにつれ様々な人間が入り乱れ、中には長州藩の間者まで紛れ込んでくるようになります。‘鬼の副長’土方は、隊士を厳しい法度で縛ることで規律を守ろうとしました。一、士道ニ背き聞敷事 一、局ヲ脱スルヲ不許 一、勝手ニ金策致不可 一、勝手ニ訴訟取扱不可 一、私ノ闘争ヲ不許の局中法度がそれで、法度に背く者は切腹。局ヲ脱スルヲ不許の通り隊士にとって逃げることは、死。つまりは脅威ということになります。「脱走」には相当な覚悟が必要でした。

今回ご紹介する山南(やまなみ)敬助は、局長近藤に次ぐ総長だったことで知られています。天保4(1833)年、仙台藩の剣術家の次男に生まれた山南は、後に脱藩し江戸での剣術修行の折、北辰一刀流免許を授かりました。彼は修行中、近藤勇道場試衛館で勇と出会い、その人柄に惚れて弟子になり行動を共にします。天皇を尊び異国を討ち払う尊皇攘夷思想のもと、浪士組として上京したのが文久3(1863)年2月23日。発起人清河八郎と別れた近藤と共に京に残り新選組を結成、八月十八日の政変にも加わりました。子母澤寛『新選組遺聞』によれば「色の白い愛嬌のある顔」、「子供が好きで、私など何処で逢ってもききと何か言葉をかけてくれた」と壬生屯所だった八木家の為三郎が談話を残す‘親切者の総長’だったようです。八木邸、前川邸を屯所にしていた新選組ですが、隊士も増え手狭になってきました。土方は西本願寺を次の屯所と定め動き出します。西本願寺は由緒ある寺ですが、豊臣秀吉由来の寺で、以来反徳川の象徴とされ長州とも深い繋がりがあり、牽制する理由もありました。押し借ろうとする土方に対し「力で事を起こしすぎると庶民の反感を買う」と山南は反論。また佐幕に寄り過ぎる組に対し、当初からの尊皇攘夷の姿勢を守りたいという思想もありました。土方ばかり重用する近藤との確執は深まり、山南は遂に禁じられた行動をとります。

慶応元(1865)年2月22日。山南敬助、「脱走」。彼は一筆書き残し、江戸に帰るため東海道を東に進みました。脱走を知った近藤は沖田駿司を追っ手に差し向けます。大津で沖田に追いつかれ、明るる23日屯所に戻った山南を待っていたのは、土方の冷たい視線と法度の通りの切腹でした。上京から丁度2年。山南は己の死を通じて組のあるべき姿を訴えたようにも受けられます。彼は自分の理想を求めて組から逃げたのでしょうか。死の覚悟をもって。山南敬助は現在、四条大宮の光縁寺墓地に静かに眠っています。享年33。

今回も多くのことを学ばせてもらった気がします。僕の「逃げ」は、理想を求めための行動なのか、覚悟があった上で逃げているのか。己の弱さからくる逃げを見つめなおす必要があると感じました。最後に、新選組参謀伊東甲子太郎(かしたろう)が山南の死を悼み詠んだ歌をご紹介します。花見の後の情景に喩え実に上手く詠んでいます。

春風に吹きさそわれて山桜 ちりてぞ人におしまるかな

いくつかのめでたい報告 “tawaki”

こここのころ、僕はすっかり馬鹿になったのでしょうか。良いことばかりが記憶に残る体質になったようです。20代の中頃までは、かなりネガティブな思考回路だったと自負していただけに自分でも驚きです。ちょこちょこ、やりきれない出来事にも直面しているはずなのですが、それ以上にすばらしいことが多いのでしょう。

といえますのも、こここのころ周囲の仲間が次々に結婚しているのです。今や多様なライフスタイルが尊重される時代。結婚という制度に縛られない生き方もアリだとは思いますが、僕自身は結婚というのは当のカップルだけでなく、それを祝福する人たちにとっても重要な意味をもっているのではないのでしょうか。

4月には何とcollectiveのオーガナイザーのkengo matsuiが~~4月~~結婚式を挙げました。朴訥キャラのkengo matsuiが大勢のゲストの前で堂々とスピーチをする姿には参列していたcollectiveクルーもグッとくるものがありました。もちろんワイフとなったミオさんが輝いていたことは言うまでもありません。

披露宴では、kengo matsui率いる「車線変更」なる急ごしらえバンドがロバータ・フラックの「feel like making love」とハナレグミの「家族の風景」のカバーを披露。参席していた牧師が「ええ曲やなあ」とむせび泣いていたのが印象的でした。

5月にはcollectiveの常連さんのモリちゃんがking ojoことブリ君と結婚式を挙げる予定です。このカップルは何とcollectiveでの出会いがお付き合いのきっかけとか。collectiveのマドンナ的存在だったモリちゃんの嫁入り到人知れず枕を濡らした男たちは少なくないと思われます。

精彩を欠いた「野郎ども」ではじめたcollectiveが、人生における重要な出会いの場となることを誰が想像したでしょうか。めでたいことにcollectiveは今回で20回目をむかえるわけですが、やはり長く続けていると、いろんな副産物が生まれてくるものです。

日常の憂さ晴らしはもちろんのこと、共に喜びあえる祝祭の場として、これからもcollectiveが続いていくことができると願っています。オーガナイザーのkengo matsuiは4月に東京に異動することになりましたが、collectiveのたびに帰阪すること。てなわけでしたららくのところ、collectiveは不滅のようです。

これからもcollectiveで素敵な出会いがあらんことを！

Erykah Badu ライヴ・レポート “mackiart”

本当は旅行の話を書くつもりだったんですが、それ以上に感激してしまったことがあったので、今回は旅話お休みです。

つい先日 erykah badu のライブを見に横浜へ行ってきたんです。先行発売で限定150枚のVIPシートが取れて感激してたんなんですが、実は彼女のことをそんなに詳しくは知りませんでしたし、ライブも友人に誘われて何となく予約という感覚で行ったんです。

ところが、、、予想以上というかむしろ人生で一番くらいの体験をした一夜になってしまったんです。まず何が一番感動したかと言うと、彼女の歌唱力の素晴らしさ。CDと同じだって言うと言いが悪いですが、CDから飛び出したみたいで、あの独特の鼻に抜ける声を生で聞けた感動たるや言葉にできません。一瞬で鳥肌がたつて隣にいた友人にしがみついでしまいました。会場はライブハウスを一回り大きくしたくらいに広さだったんですが、声がかつた隅々までに行き届いて包まれる何とも優雅なこと。最近出したアルバムのリリースツアーだったこともあり、アルバム通り全体的にゆったりとした大人々な選曲が多めの構成でした。

舞台装飾は特に無く、照明でステージを彩るくらいだったんですが、この照明も素晴らしい！完璧のタイミングで舞台を彩る技のすごさってないですよ。あの規模のライブハウスであれだけ巧みに照明を発揮できるんだから、彼女の音楽を完全に理解しているんだなーなんて勝手に思いながら見てました。

バックバンドはもちろん打ち込みでなくて生バンド。コーラスが3人も入ってドラム、ギター、ベース、DJと小さい舞台なのに大所帯！それ以外にテルミンやエリカ専用の電子ドラム、パソコン、などなど盛りだくさんで迫力満点。パソコンの横にティーポットが置いてあり、曲の合間にエリカがコップに注いでゆっくり飲んだりもしていて、やることなすこといちいちお洒落。当然ファッション(舞台衣装)も飾らないのにお洒落。最後にはエリカの子供まで登場して、そんな予想外の展開に会場も大盛り上がり。ライブ開始から終了まで素晴らしい構成で内容も濃いし満足できなかった瞬間は一度も無かった100点満点ライブ。

アンコールも入れてまるっと2時間。知らない曲も多かったのに一度も飽きることなくあっという間に終わってしまいました。あんなに飲んで踊ったライブは今までなかったですからね。そういう意味でも人生一番！嗅覚以外の五感をフル活用してエリカのグルーヴをがっちり自分のハートに刻み込みました。またあの感動を味わいたいものです。

Erykah Badu
new amerikah part 2 :return of the ankh
motown /2010

